

三代目・木村半兵衛の日誌（明治八～一八年）にみる名所の観光、行楽、寺社の参詣、温泉場への湯治等に関する考察

麻生千明

元・足利大学教授

Consideration about Sightseeing of Famous Place, Vacation, Going to Hot Spring Reveled of Third Generation KIMURA HANBEI's Diaries Meiji 8~18

Chiaki ASOH

Abstract

Great Commerce HANBEI KIMURA, living in Omata Village have left Several Diaries in Early Meiji-Era. Everyday's Events are Recorded in those Diaries. This Paper consider about Sightseeing, Vacation, to Hot Spring revealed in his Diaries from 8 year to 18 year of Meiji-Era. Kimura Hanbei Went to Capital Tokyo Several Times Every Years. Purpose of His Going to Tokyo was Bank Requiemets. But During His Stay in Tokyo, He Visits Many Acquaintance and Enjoy Sightseeing Historic Sites. He and his Family enjoy Sightseeing Tokyo, Nearest Prefecture, Gunma and Tochigi, Asikaga Town. And His Family often went to hot spring, IKAHO, SHIMA, KUSATSU etc.

Keywords: HANBEI KIMURA's diaries, Sightseeing, Vacation, Going to hot Spring

はじめに

木村半兵衛は明治六年から、亡くなる明治十九年まで毎年日誌を書き残している。明治六年と七年の日誌は教育資料集のものであるが、明治八年以降の日誌は、まさに日毎の出来事が記録された日誌スタイルのもので、木村半兵衛をはじめ木村家の日常生活や当時の社会の風俗習慣等を知り得る貴重な資料とすることができる。別稿(二)では、その半兵衛の日誌を資料に年頭の諸行事、年

中行事(国の祝日、宮中行事)、地元神社の祭礼等について考察した。なお半兵衛は第四十一国立銀行の開業前後より銀行用等でしばしば上京、上京中は用務の合間に親戚、知人宅を訪れたり、名所等の観光や行楽もおこなっている。その他、半兵衛や家族が近隣の群馬県や栃木県内の名所等を観光や行楽に出掛けたり、寺社の参詣、温泉場への湯治等もみられる。特に半兵衛が明治一四年秋に大病に罹り、一五年五月まで約半年間、東京で療養生活を送った後は毎年家

族で四万温泉に湯治に向いている。本稿は、半兵衛の明治八年から一八年までの日誌を資料に、半兵衛および家族、知人等による上京中および近隣の群馬、栃木両県内の名所等の観光、行楽、寺社の参詣、温泉場への湯治等について考察することにする。(各年の日誌からの引用は注(一) 掲出別稿と同じ)

木村半兵衛は、明治六年三月に栃木県第六大区(足利郡・梁田郡)担当の学区取締に任命になり、以後、専ら担当地域の教育振興のために尽力している。

(三) として明治六年の日誌『學區日誌』中に「十一月六日出發中仙道本庄宿へ廻り東京へ療養ニ罷出ル 学務御掛へ十月廿六日〆三十日間休暇相願出京之事」とあり、「十一月三十日帰村」と記されている。(三) 織物買継商を営んでいた木村家では、明治初年より商店の使用人や長男の勇三が商用等で頻繁に上京していることが日誌に確認される。ところで半兵衛自身の上京に関しては、右記のように明治六年一月六日から月末まで病氣療養で上京したことはあったが、商用等で上京することはなかったようである。半兵衛はその後、明治一〇年九月には学区取締を辞任、その後より第四十一国立銀行の設立に尽力、明治一一年九月に同行栃木本行、一〇月に同行足利支店が開業となる。その銀行開業前後の明治一〇年以降は半兵衛自身の銀行用等での上京が多くなる。そして上京した折は銀行用の合間に親戚知人宅を訪問、名書画等を鑑賞したり、また東京の名所等の観光や行楽をおこなっている。以下、明治一〇年以降、各年の半兵衛の上京中における観光、行楽について考察することにする。

一、上京中における半兵衛や家族等の名所等の観光、行楽

(一) 明治一〇年十一月五日〜二九日：博覧会の縦覧、九段坂招魂社参詣、金沢八景等の観光

日誌によると、半兵衛は明治一〇年十一月五日から二九日まで上京している。五日に足利市を終えて上京、本庄、大宮を経由して七日に東京着。東京では第四十一銀行の創業者安田氏宅をはじめ多くの親戚、知人宅を訪問しているが、その合間に観光、行楽等もおこなっている。九日は午前、午後と終日、上野の「博覧會縦覧」。一二日は山下御門内博物館を縦覧。一三日は村松町の美術商、

大橋玄六宅を訪問「書画縦覧ス」。夕刻は本所石原の菊地永之助宅を訪問、「書画道具類」を購求、一五日は鈴木木要三と同伴で再度「上野博覧會縦覧」。

半兵衛の今回の上京は博覧会の縦覧も主要目的だったと思われる。同年春以降、博覧会の出品の件で区務所で何度も打ち合わせをしている。すなわち四月二六日は「第二課新谷七等属内国博覧會ノ義ニ付御出役僕モ直ニ足利〆乗車」、翌二七日も「区務所へ出頭博覧會出品目録調理」、五月九日も「区務所へ出頭博覧會出品調」と博覧会への出品をめぐる検討を重ねている。そして半兵衛の上京に先立って一〇月一〇日には「午前十時かつ」とよ 明十郎 多つ合四人東京へ発足足利支店〆とく 太助出發明十一日舟ニ而出京ス勇三今十日足利市仕舞川島長十郎氏同伴出京博覧會見物ニ付」、一〇月二三日の欄外には「〇忠三郎東京博覧會行」と家族等が博覧會見物のために上京しているのである。

博覧會を二度縦覧した半兵衛は、一七日は「午前八時過小舟町安田氏を訪ヒ鈴木氏三人同乗吹上御庭園拝觀ス九段坂招魂社へ参詣園中遊覽萬代軒ニおゐて洋食ス」と日誌にあるように銀行創業者の安田氏を訪問、その後、安田氏、鈴木氏と三人で吹上庭園を拝觀したあと九段坂招魂社を参詣している。

九段坂招魂社は、幕末、明治維新の激動期に国家のために殉難した多数の人々を慰霊するために明治新政府が設立した神社で、従前は「招魂場」と呼ばれ各地に設けられていた。明治元年(一八六八)、討幕運動で非業の死を遂げた尊皇の志士の霊を奉祀すべく京都東山に設けられたのが最初で、次いで東京招魂社が同五年に九段坂に建てられたが、明治八年(一八七五)、招魂社の制が定められ東京招魂社を中心に整備されていった。東京招魂社は明治一二年(一八七九)、明治天皇の命により「靖国神社」と改称され、昭和一四年(一九三九)、全国各地の招魂社は「護国神社」と改称、各府県に一社が設けられた。九段坂の招魂社界限は、明治初年から特に祭礼時期は賑わいをみせていたようで、『明治世相編年辞典』には明治三年頃の「招魂社祭礼」の模様について「五月一四日より九段招魂社(現在の靖国神社) 祭礼。貴賤群集す。一四日太々神樂(だいだいかぐら)、一五日祝砲、一六日・一七日昼夜花火、一八日角力、夜花火のところ雨降る。町々飾り物を施す。」(四)と報じられている。

一月一九日は「新橋ステーション」^(五)から鉄道で横浜まで行き、横浜波止場から「横スカ通蒸気船」で横須賀に到着、該所で器械場を縦覧、「実二廣太無双驚眼二不堪感服ス」と感想を記している。さらに船で金沢野島崎まで行き宿泊。翌二〇日は「金澤八景ヲ縦覧ス」。そして横浜で能見堂に立ち寄り、再び船と汽車で東京に戻っている。二二日は「都合七人同伴王子製紙場及木綿糸製造場等縦覧ス」。半兵衛は織物業を営む商人であるとともに産業人でもあった。

したがって名所等の観光だけでなく各地の特に織物関係の工場にも大いに関心をもって見学している。二三日は再び大橋玄六宅を訪問「終日書画珍蔵披覧ス」。二五日は「谷中天王寺及天龍院へ墓参ス」。天王寺には幸田露伴の小説「五重搭」のモデルになる五重搭があり、天龍院には幕末期に尊王派の活動家として名高い菊地教中の墓がある。いずれも半兵衛の親戚「佐野屋」の菩提寺であり、半兵衛は上京するたびに必ず谷中の墓参もおこなっている。そして二八日に東京を発ち翌二九日に小俣に帰宅している。

(二) 明治一一年六月四日～二〇日：新富座の歌舞伎見物、浅草奥山等の遊歩

明治一一年は六月四日から二〇日まで上京している。四日に出発、本庄で一泊し翌五日、深谷、大宮を経由して東京に到着。今回は特に行用はなく、本所緑町と林町の小林宅、浅草の家城宅など親戚知人宅を訪問しているが、その間、八日は「中治同伴午後一時頃向嶋邊へ散歩ス」。「中治」、すなわち中村治平と共に向島辺りを散歩している。九日午後は「芝山内公園地ヲ遊歩ス」。一二日は総勢九人で「午前七時新富座へ見物ニ参ル」。新富座とは東京の歌舞伎劇場である。一三代守田勘弥が明治五年（一八七二）一〇月、猿若町にあった守田座を京橋区新富町に移転、町名に因んで「新富座」と称するようになり、さらに明治八年一月に改築した。やがて団（市川団十郎）・菊（尾上菊五郎）・左（市川左団次）の三名を中心とする新富座時代と呼ばれる歌舞伎隆盛の一時期をつくったが、大正一二年（一九二三）、関東大震災で焼失、廃絶した。

一五日は親戚の小林源兵衛と同伴で「浅草奥山へ遊歩」。「浅草奥山」とは浅草観音堂裏の俗称である。そして二〇日に東京を離れ、館林の小室宅、足利支

店に立ち寄り午後五時に帰宅している。

なお同年は九月一四日にも上京、安田宅、緑町の親戚小林宅等を訪問、二一日に足利支店に宿泊、翌二二日に帰宅しているが、極めて短期間の、恐らく銀行用での上京だったと思われるが、観光行楽等の記述はない。また銀行開業の翌明治一二年も銀行業務等で多忙だったためか上京の記録はない。

(三) 明治一三年：四月、七月、一〇月の三回上京

明治一三年は四月、七月、一〇月の三回上京している。

① 四月一三日～五月一日：千住宿製絨場、丸山伝右衛門邸宅等見物

半兵衛は四月一三日、車夫五郎平の人力車で出発、館林、行田を経て鴻巣に宿泊、翌一四日、大宮を経て東京緑町の親戚、小林宅に到着する。到着後は第四十一銀行の創業者安田宅、安田銀行、第三銀行をはじめ親戚、知人宅を訪問しているが、その間、一七日は「全善兵衛君宗兵衛君同伴上野観古博覧場へ見物ニ行公園地八百善桜二而酒食」。上野観古博覧場は上野博物館の前身であり、八百善は江戸時代からの老舗料理店である。半兵衛は上京した折は必ず博物館や博覧会、共進会等によく縦覧している。翌一八日は本所緑町の小林祐之助、源三郎と同伴で「呉服橋内観業場へ見物」。「観業場」とは「勧工場」とも称する。種々雑多な商店が組合をつくり一つの大きな建物内に各種の商品を陳列して商う所で、のちに百貨店に発展するものである。翌一九日は「浅草田町家城氏参り藤兵衛氏山木屋仙助氏案内ヲ以千住宿製絨場へ見覧ス都合六人」と、総勢六人で千住宿製絨場を見覧、「真二盛大ノ器械場ナリ」と日誌に記している。そして夕刻は「余ハ大川端安田邸へ推参抹茶及會席料理馳走ニナル」。

千住宿製絨場は、明治一二年（一八七九）、東京荒川の南千住に設けられた官営の被服生地製造工場である。明治新政府の軍服・制服はしばらくの間、外国からの輸入に頼っていたが、外貨減少を抑えるため国産化が必要であるとの認識から、まず明治八年（一八七五）、千葉県に牧羊場が設けられ羊毛の生産が開始されていた。そして同年中に被服製造技術を学ぶためドイツに派遣されていた旧長州藩士・井上省三の帰朝をもって明治一二年九月二七日、東京・南千

住の広い荒れ地に製絨所が完成、操業を開始したのである。明治一六年（一八八三）、火災により製絨所のほとんどが焼失、復興に尽力した井上も病気で亡くなるが、明治二一年（一八八八）、陸軍省の管轄となると工場を拡張、陸軍所要の布地類、毛糸等を生産・管理した。また他官庁や民間からの製造、研究の依頼、さらに技術指導や技術者養成の依頼にも陸軍大臣の認可をもって応ずることとされ、国内繊維・被服産業の発展に大いに貢献した。戦後、敗戦により操業停止、民間企業に売却されたが業績不振により昭和三五年（一九六〇）閉鎖された。煉瓦製の塀の一部が産業遺構として保存されている。

二三日は安田氏、銀行員鈴木要三氏と共に人力車に乗車、再度「上野観古博覧會へ見物」。山門にて勇三とも会い、池の端清涼亭で酒食後、四人で乗車、「本所五ツ目丸山傳右衛門氏の家屋」を見物、その模様について「家屋ノ艶美庭園ノ奇石銘木等同家翁主人案内緩々充分閲覧」と日誌に記している。

丸山伝右衛門は、深川の材木商・信濃屋の主人で通称「シナ伝」。明治初年、御用商人として財をなし、邸内に屋根上に金鶏を載せた五層の楼閣を建築、「鳳凰閣」と称された。唐木細工など贅の限りを尽くした建築物であり、また庭園の結構も目を見張るほど立派なものであった。なお伝右衛門の娘は、のちに政治家、黒田清隆の夫人となった人物である。

二四日は第三銀行を訪れた後、「午後三時前鈴木氏同伴安田氏別荘へ訪ヒ待茶席へ詰合上客渡邊議官同令閨長四郎三鈴木要三余廿五名鄭重ナル料理馳走ニナル夜二入長歌所作作踊式態アリ舞子式女囃方一人三味線唄一人：夜十一時一同退散」と安田別荘での盛大な宴会の様子が日誌に記されている。二五日は本所石原の佐野屋永之助君宅を訪い「名書画縦覧」。二六日は第三銀行に立ち寄った後、大橋玄六、小林祐之助、大橋良吉らと同伴で「上野観古美術會縦覧ス」。今回、三度も縦覧した上野観古美術会とは、前年（明治一二年）の「社社什宝永世保存之儀」を受けて開催されたもので、のちに日本美術院へと発展する。二九日は「林七同伴谷中一条寺天王寺天龍院へ墓参ス」。翌三〇日に帰途に立ち、本庄に一泊、翌五月一日に粕川家に立ち寄ったあと小俣に帰宅している。

②七月一八日～七月三〇日：芝居見物、吉原燈籠、墨田川水燈等を見物

二回目の上京は七月（注、日誌は六月となっているが、七月の間違い）一八日に出発、糟川に立ち寄り本庄内田宅に一泊、翌一九日は本庄より清壽軒の馬車にて東京支店到着。第三銀行や親戚、知人宅を訪問。その間、二二日は家城氏等「四人連ニ而猿若町一丁目芝居見物」。午後九時に芝居見物を終わり「夫吉原燈籠見物ス夫浅草観音寺内尾張屋ニ而酒食」。翌二三日は親戚、知人等「五人連レ厩屋川岸の家根舟ニ乗シ墨田川水燈ヲ見物ス歓娛ヲ盡ス」と、存分に遊興を楽しんでいる。二四日は「安田氏別荘へ訪ヒ面會銀行要件熟話ス」。そして二九日に帰途に立ち、翌三〇日に小俣に帰宅している。

③一〇月五日～一九日：浅草観音池公園の遊歩

三回目の上京は一〇月五日に人力車で出発、本庄で一泊し翌六日東京着。東京では安田氏をはじめ親戚、知人宅を訪問。その間、八日は大川通令善兵衛宅を訪問「書画縦覧其内数幅購求ス」。その後、第三銀行へ出頭。九日午前浅草田町の家城宅を訪問、午後は「安太郎氏小野専助氏同伴浅草観音池内公園ヲ遊歩」。その後、夕刻より菊地家にて「琴平神社祭大宴會馳走ニナル」。地元の琴平神社の祭礼で宴会がおこなわれており、馳走になっている。

ところでこの日に遊歩した浅草観音池公園は、大型観覧車やゴーカートなど娯楽施設が充実しており、約三千本の桜やツツジ、菖蒲など四季を通じて美しい花が楽しめる公園であるが、明治一〇年代半頃には公園もかなり整備されつつあったようである。前掲『明治世相編年辞典』には、明治一六年頃の「浅草公園地の状況」について、「五月二六日、浅草寺旧西火除地一万六百余坪の埋立が完成、この地を公園地として、中央に園池を掘り、中島を設けて、見世物大小十一軒、飲食店大小十五軒、楊弓店およそ二十軒、水茶屋およそ三十軒、写真店およそ十軒などの見つもりにして、観音堂周囲廿間以内の全出店を移すこととなる。当時浅草寺境内の状況は、見世物十一軒、飲食店十五軒、楊弓店三十四軒、写真屋廿八軒、待合八軒、水茶屋四十七軒、寄席三軒、玩物二十一軒であった。」とある。すなわち当時、公園界限には飲食店や娯楽関係の店が多

く立ち並び、かなりの賑わいをみせていたものと思われる。

一〇日午後は本所横綱の安田別荘にて盛大な宴会、一四日は菊地宅にて「名書画披覧」。一九日に東京を發ち足利支店に一泊、翌二〇日に帰宅している。

(四) 明治一四年：四月、八月、十一月と三回上京

明治一四年は、半兵衛は四月、八月、十一月の三回上京している。

① 四月一二日～五月二日：墨堤桜花の見物、芝紅葉館での盛大な宴会

四月一二日に人力車で出發、本庄内田家に一泊、本庄よりは清壽軒の馬車で翌十三日に東京支店に到着している。東京到着後は第三銀行、安田銀行をはじめ親戚、知人宅を訪問、その間、二〇日には小高清兵衛、中島喜代次、松本常一郎ら四人で上野博覽會を縦覽、「該場へ主上御幸洋物樂ヲ奏スルヲ拝見ス」。当日、ちょうど天皇の行幸があつたようで、『明治世相編年辞典』に、明治一四年の出来事として「三月一日、上野公園新築の博物館を使用して、第二回内国勸業博覽會を開く。四月一四日、天皇行幸通覽された。」⁽⁷⁾とある。

二一日は小高氏らと四人で「新富町へ見物ニ参ル」と、新富座の歌舞伎を見物に行っている。翌二日は家城氏らと四人で「向嶋へ墨堤桜花見物ニ遊歩」。

この頃の墨堤桜花は、桜の木もあまり多くなかつたようであるが、その後、植樹に努め、日清戦争前後には名所に数えられるほど見応えのある姿になっていたようである。『明治世相編年辞典』に、明治一六年「一〇月、隅田堤の桜が、七年、一三年、一四年と増植につとめた甲斐なく乏しいのを憾み、成島柳北（文学者。一八三七～八四）、大倉喜八郎（実業家。一八三七～一九二八）らの發起で一千株の補植を依頼す。この時植えたのは梅若から枕橋までで、一八年に綾瀬橋より千住通川上川口迄の荒川堤にも植え、日清戦争前後には桜の花のトンネルとして名物に数えられる。二〇年五月、榎本武揚（政治家。一八三六～一九〇八）、浜村大澤らによって墨堤植桜の碑が建てられた。」⁽⁸⁾と、桜が増殖され、日清戦争前後には公園がかなり整備されている状況が記されている。

二三日には九段坂の「招魂社へ参詣」。二四日は敬三、穴原と三人で「上野博覽會へ縦覽ス夫々谷中天王寺及天龍寺へ墓参又夫々日暮ノ里へ遊歩」。二六日は

敬三らと四人で「勸工場で買ものに行」。二七日は「安田氏招待ニ預り芝紅葉館へ昇殿」。芝紅葉館とそこでの盛大な宴会の様様については、続けて日誌に「頗ル佳景殊ニ建築清麗壮美ナリ馳走アリ藤川橡木縣令属官佐藤保之佐藤信哉原近知其外ハ小林年成同年保君余四五名盛宴ナリ中島氏同席ス」と記されている。

芝紅葉館は明治一四年（一八八一）二月一日に会員制料亭として設立された。子安峻（こやすたかし、実業家、一八三六～九八）らが芝公園楓山の借用を明治一三年六月七日に出願、これは府庁の誘導によるもので、七月一〇日に第一回内国勸業博覽會出品の家屋を建設することとなり、一二月一四日に紅葉館と改称、翌年開場したのである。（芝公園例則）開業後は豪商・中沢彦吉等が社長を務めた。明治三三年（一八九〇）に鹿鳴館がわずか七年で消滅した後は、条約改正をにらんだ外国人接待の場、実業家・文人・華族・軍人の社交場として大いに利用され、東京名所図会や東京銘勝会にも収録された。また近くに水交社があつたため、海軍関係者が頻繁に利用していた。昭和二〇年（一九四五）年三月、東京大空襲で焼失、敷地跡には東京タワーが建造された。⁽⁹⁾

そして東京での所用を終えて五月二日午前四時に人力車で出發、一日中走り続けて同日の午後五時半頃に小俣の自宅に到着している。

② 八月二五日～九月六日、銀行検査を間近に控え銀行用で上京

同年の二回目の上京は、八月二五日に夏季休暇を終え慶應義塾に戻る敬三と共に出發、本庄の内田宅において糟川守平も合流、翌二六日午前一時に清壽軒馬車で東京に向け出發する。八月三〇日は駿河台の山崎忠衛門宅を訪問「銀行業務細詳質問ス同君懇切御教示アリ」とある。半兵衛の今回の上京は九月末に銀行検査を控え、そのための対策、示唆、助言等を得るためであつたと思われる。したがって今回は特に観光や行樂等に関する記録はない。九月五日に東京を出發、栃木本行に立ち寄り一泊し翌七日に小俣に帰宅している。

③ 十一月一七日～二四日、半兵衛が大病に罹り診療のため上京

九月末の銀行検査等で半兵衛もかなりストレスがあつたのか、九月一四日の

日誌に「余時候ニ触レ腸胃カタル渡邊道圃氏ニ診察ヲ乞ヒ服薬」、さらに九月二九日の日誌に「余不快終日絶食病ハ胃腸カタル時候ニモ触レ甚苦痛ス」、さらに一月九日は「△持病心下痛強シ」と持病の心下痛による苦痛を訴えている。同年には一月一七日に三回目の上京をしているが、今回は持病の心下痛の悪化により東京の名医、小林恒先生に診察してもらうためであった。したがって今回は観光や行楽等の記録はない。診察を終えて一月二四日に一旦帰宅するが、一二月に東京での療養生活を送るため再度上京する。

(五) 明治一四年一二月一二日、明治一五年五月九日、東京での療養生活：

神田明神、芝神明宮、増上寺、愛宕山等を参詣、竹澤藤治の曲芸見物

半兵衛は明治一四年一二月一二日、東京で療養生活を送るため蒸気船通運丸で上京、以後五月七日までの約半年間、療養生活を送ることになる。その間、家族等が看病に携わり、また多くの親戚、知人が見舞いに訪れているが、彼らは半兵衛の看護の合間や見舞いのついでに東京での観光もおこなっている。例えば東京に到着翌日、小林恒医師の診療を受けた翌一二月一四日の日誌には「老母まさ吉野松本ミツ四人新富町梨園見物ニ遣ス」とある。「遣ス」とあるから、半兵衛が勧めたのであろう。吉野は半兵衛の看護のため雇用了人物である。

「梨園」とは歌舞伎のことである。唐の玄宗皇帝が梨の木のある庭園で、みずから音楽・舞踊を教えたという『唐書』礼楽志の故事から、俳優、特に歌舞伎役者の世界のことを「梨園」と称するようになった。同月一六日も「午前八時前岩下善七郎氏男信二氏来車直ニ帰車 尤も新富座へ見物かけ立寄」と、岩下善七郎氏らが新富座への歌舞伎見物を兼ねて見舞いに立ち寄っている。一二月二〇日は「午前老母まさ吉野三子呉服橋内勸工場へ買ものへ参ル」。

また半兵衛も療養生活のなかで余興も楽しんでいる。一二月二七日は「〇赤坂より春ノ一坊當時枇杷法師東京第一ノよし呼寄午後四時 枇杷平家物語奏曲午後八時過ニ終ル」と赤坂より琵琶法師春の一坊を呼んで平家物語の奏曲を鑑賞している。翌明治一五年一月二九日も「午後三時春ノ一來車平語ノ内那須与一ノ段一曲奏ス」と、再度、琵琶法師を呼んで「平語」すなわち「平家物語」

のなかの那須与一の段の演奏を鑑賞している。

療養生活も三カ月も経過すると半兵衛の病状がかなり回復、体調が比較的良好な日は観光、行楽、寺社参詣等に赴いている。三月二一日は「予敬三共二神田大明神参詣」と、「予」すなわち半兵衛と敬三、二人で神田明神に参詣に出掛けている。神田明神は、平安時代の天平三年(七三〇)、武蔵国豊島郡芝崎(現在の千代田区大手町將軍塚付近)に創建された古寺である。のち延慶二年(一三〇九)に平将門の霊を相殿に祀り「神田神社」と名付けられた。江戸の総鎮守として歴史を重ね、多くの人が聖地として訪れてきた。当時、神田明神の祭礼はかなり賑やかだったようである。『明治世相編年辞典』には、明治五年、九月一五日の神田明神の祭礼の様相について「当年より隔年、神田町々は東西五ヶ年目に神輿を渡すことにきまる。練りもの多く出たが、慶応以前の半分以下であった。車輿三十五台、仮踊台三荷も出て賑やかであった。」¹⁰とある。神田明神の祭礼は、江戸時代はもとと華やかだったようである。現在でも商売繁盛の神社として多くの人が詣でている。

翌三月二三日は「予銀坐邊へ遊歩」。「予」とは半兵衛のことである。同月二六日は「松安氏同伴しむ子横濱見物ニ参行ス」とあり、さらに同日の日誌に「午後七時過松安氏しむ横濱へ帰宅」とある。「松安氏」とは半兵衛の二女とよの婿養子になった松本常一郎の父、松本安兵衛の略記である。翌二七日は「しむ吉野兩人浅草邊へ遊歩ニ参ル」。「吉野」は半兵衛の看護人である。この頃は半兵衛も体調が良かったのであろう、三月三一日は「中通へ遊歩」。四月二日は「午後一時過獨歩芝神明宮へ参詣夫々増上寺へ廻り返りニ愛宕山へ登山参詣」と東京市内の有名な寺社等、数カ所を参詣に歩いて巡っている。

芝神明宮は、もともとは武蔵国日比谷郷に鎮座していたが、慶長三年(一五九八)八月、現在地(芝大門)に奉遷、江戸時代は幕府の庇護を受けてきた。また増上寺が隣接していることもあって参詣者が増えた。江戸時代は庶民の間で伊勢参りが流行したが、伊勢までは高額な旅費と長期間を要するため、代わりに伊勢神宮の祭神を祀り江戸市中に鎮座する当神宮への参詣者が増加した。また当神宮はたびたび火災に遭い、何度も再建された。

増上寺は、空海の弟子・宗叡が武蔵国貝塚（現在の千代田区麹町）に建立した光明寺が前身である。室町時代の明徳四年（一二九三）、浄土宗第八祖西誉聖聡（ゆうよしょう）の時、真言宗から浄土宗に改宗し、寺号も増上寺と改めた。したがって彼は実質的な開祖といえる。徳川家康の時代に菩提寺となったようである。慶長三年（一五九八）、江戸城の拡張に伴い、家康によって現在地の芝に移築された。明治維新後は神仏分離政策の影響により規模は縮小し、境内の大部分が芝公園となった。

愛宕山は、江戸時代からの信仰と、山頂からの景観の素晴らしさで有名な場所であった。山頂にある愛宕神社は慶長八年（一六〇三）、徳川家康の命により創建され、防火・防災に靈驗ある神社として有名になった。また「男坂」と呼ばれる急な階段は「出世の階段」として知られている。

四月七日は「午前九時過支店へ小源氏来臨共上野行充分遊行」。「小源」とは本所緑町の親戚、小林源三郎の略記である。四月一日は「午前明十郎吉野鏡三人浅草奥山竹澤藤治見物二遣ス」。「吉野」は半兵衛の看護人である。

竹澤藤治は数代伝わる独楽の名人で、当時、浅草奥山で曲独楽や軽業等の興業を営んでおり大勢の見物客で賑わっていた。江戸東京博物館所蔵の「新板浅草奥山芸人尽」に、曲独楽「竹澤藤治」の絵がある。明治一五年以降は、新聞記事に「竹沢藤治」の名前で登場していることから、明治一四年の遅い時期に藤治を襲名したものと思われる。『見世興行年表』明治一五年）明治一五年三月には竹沢藤治の曲独楽興行が大評判で、一五日には吉原の芸者一同が総見物したと言われている。(二)

四月二一日は「かつ子鏡両人緑町小林とく子同伴久松座へ見物ニ参ル」。歌舞伎の見物である。翌二二日は「浅草川村定七宅へ訪ヒ同氏同伴東本願寺観古美術會場へ見覧ニ参ル」。当時、四月一日から五月二一日まで浅草本願寺で龍池会の第三回観古美術博覧會が開催されていた。(三)なお同日は「敬三守平両人江ノ島鎌倉見物發足ス」。二五日は「余明十敬三守平定八五人上野公園地へ遊歩博物館見物」。翌二六日も浅草の家城宅訪問後、「由兵衛君茂兵衛君共三人觀音境内充分遊歩竹澤藤治見物」。翌二七日は足利方面から石井直兵衛、深沢織之助、

広瀬定兵衛ら諸氏が半兵衛の見舞いに訪れ、その足で正午過ぎに「熱海温泉行也」。東京での療養生活が終わりに近づいた五月一日、半兵衛は「午前八時獨歩招魂社へ参詣充分公園遊歩」。翌一日は「かつ子 明十郎 吉野子亀井戸行」。恐らく亀戸天神を参詣したと思われる。翌三日は「午前八時單身獨歩谷中 天王寺天龍院 墓参ス」。翌四日は緑町と林町の小林両家を訪ね「両小林同伴亀戸天神藤花見物二行」。七日に帰途に立ち、大宮を経由、鴻巣と本庄に一泊、糟川に立ち寄り一〇日に小俣に帰宅している。途中、立ち寄った本庄と糟川の親戚宅では、長期間に及んだ療養生活を無事に終えたことの報告も行ったであろう。

(六) 明治一五年一月四日～一日：上野絵画共進会の参観が主目的

明治一五年五月に東京での療養生活を終えて帰郷した半兵衛は、半年後の一月四日から二四日まで再び上京している。四日に馬車と川蒸気船を乗り継いで同日午後九時に東京に到着。高取川岸より川島長十郎も同行している。到着二日後の一二月六日には「前九時 田野氏 相場 川島 余 敬三 五名同伴上野繪画共進會へ詣ル」と医師の田野俊貞、相場朋厚、川島長十郎、敬三らと五人で上野繪画共進會を觀覽、山内八百善で酒宴、さらに四日後の一〇日にも「元濱町令宗兵衛君藤兵衛君大橋玄六君共四名二而上野共進會へ縦覧山内八百善二而酒食」と総勢四人で上野繪画共進會を参観、その後酒食している。

ところで共進會とは、博覧會が多種多様な物品の展示であるのに対して「同様の物品を一場に蒐列し、製造人勉否、製品の優劣を照会公定するを目的」（共進會規則）とするもので、毎年、いろいろな共進會が開催されてきた。

上野繪画共進會は、明治一五年（一八八二）に上野で開催された官営の繪画の展覧會である。明治初期の文明開化の風潮は日本固有の美術の衰退を招来したとの反省から、伝統保存の機運が高まるなか、日本の伝統美術の振興を意図して「内国繪画共進會」と称して一〇月一日から一二月二〇日まで上野公園で開催されたものである。出品は洋画を除いて流派には拘らなかつた。(三)

一一日は「午前六時晴静 かつ とく 明十共三人舫車二輛熱海へ出車」と家族三人が熱海温泉に出かけている。半兵衛は一七日、浅草田町の家城家（商

店)を訪問、「午後帰りかけ浅草公園池遊覧 手代由兵衛同安太郎氏三人」と三人で浅草公園地を遊覧。翌一八日も家城宅訪問後「安太郎茂兵衛両氏共鳥ノ町へ参詣夫々遊歩谷中天王寺へ佛参一乗寺へ墓詣」と鳥ノ町(西の町)参詣、谷中へ墓参、「夫々上野共進會へ罷出○本日 皇太后 后宮 共進會へ行啓縦覧人ハ午後二時半〆御許」とある。上野共進会の参観は、六日、一〇日に続いて実に三度目である。なお一八日の共進会は皇太后等の行啓と重なり、一般人の縦覧は午後二時半から許可されたことが日誌に記されている。翌一九日は「足利町〆草雲老人出京到着泊ス共進會ニ付」と、足利から田崎草雲が上京するが、開催期限が終日に迫った上野絵画共進会参観のためと記されている。今回の半兵衛の上京は、上野絵画共進会の参観が主要目的であつたと思われる。

(七) 明治一六年三月：銀行用務が主目的、上野水産共進会を縦覧

半兵衛は、明治一六年は三月三日から一八日まで一回のみ上京している。三日に出発、途中、糟川氏に立ち寄り本庄の内田家に一泊、翌四日は道路大泥濘のなか鴻巣宿に宿泊、翌五日夜刻に東京支店に到着している。今回の上京は銀行用務が主で、東京支店到着後、第三銀行を訪れており、八日は創業者安田善次郎宅を訪れ「為替方云々種々談示ス」。翌九日には石原の菊地永之助宅を訪問「書面数幅閲覧」。一五日は「午前八時穴原ヲ從へ上野へ遊歩天王寺へ墓参夫々水産共進会へ見物」。前年は上野で絵画共進会が開催されたが、明治一六年は三月一日から五月まで「上野公園竹の台にて水産物大博覧会を開催」(二四)、それを縦覧したのである。そして一六日に東京を船便で発ち、栃木本行、足利支店に立ち寄つて一八日に小俣に帰宅している。

(八) 明治一七年五月：上野絵画共進会の見物、高島山遊覧

半兵衛は、明治一七年は五月一八日から二四日までの約一週間、上京している。一八日の朝出発、粕川に立ち寄り本庄の内田家に到着、「亡父四十九日當墓参」を済ませ、本庄からは汽車で夜半に東京支店に到着している。翌一九日は「全作 常一郎 宇七 余 四人上野共進會場へ見物ニ参ル」。翌

二〇日は中村治平宅を訪問、「治兵衛主人ト共二午十二時十五分瀛舟新橋乗し神奈川高島山へ遊覧ス」。翌二日は小林医師を訪問後、「谷中天龍院天王寺一条寺等へ墓参ス」。翌二日は小網町の安田氏、石原の菊地宅を訪問後「午後上野絵画共進會へ見物ニ行」と二度目の共進会の見物である。ところで同年の三月二八日の日誌に「草雲老翁始門人等共進會出画博覧ス」とあり、この絵画共進会には田崎草雲とその門人らの作品の出品もあつたようであり(二五)、大きな興味と関心をもつての縦覧であつたと思われる。そして二四日「午前十時過出車上野ステーション(二六)〆瀛車ニ搭シ」帰途に立つ。翌明治一八年の日誌には半兵衛の上京の記録はない。

以上、半兵衛の日誌より、上京中の半兵衛自身や家族・知人等の名所の観光、行楽について考察してきた。次に隣県の群馬県の寺社参詣や観光、行楽について考察することにする。

二. 群馬県の名所等の観光・行楽、寺社参詣

(一) 太田金山、新田神社、舌龍上人、高山神社の参詣

群馬県は隣県で特に太田町は小俣から極めて近く、半兵衛の日誌によると太田金山、新田神社等へは家族、知人等が何度も参詣に訪れている。早くは明治八年五月二二日の日誌に「午前七時かつ せい 登代 志む 敬造 良造 まさ 差添半二郎婢きく合九人太田金山新田神社参詣人力車三輛午後六時廿分帰宅」とある。半兵衛自身は参加していないが、家族と使用人等総計九人、人力車三輛で日帰り太田金山、新田神社を参詣している。

太田金山の山頂に山城があり本丸跡とみられる場所に新田神社があり、全体が「新田金山城」と呼ばれている。史跡環境整備事業に伴い、平成四年(一九九二)より発掘調査が開始された。建武三年(一三三六)に佐野義綱が新田城を攻め落としたという記録があり、新田城は新田義貞によつて金山に建築されていたという説があるが、その時代の遺構や遺物は発掘されていない。文明元年(一四六九)、新田一族であつた岩松家純によつて築城される。以降、享禄元年(一五二八)に由良成繁・国繁親子、天正一二年(一五八四)には北条氏と

城主は変わったが、上杉謙信の攻撃を退けるなど関東七名城のひとつに数えられている。天正一八年（一五九〇）、豊臣秀吉の小田原征伐の際に攻撃を受けて落城、そののち廃城となった。昭和九年（一九三四）二月二十八日、「金山城跡」として国の史跡に指定された。

新田神社は、「建武の中興」で有名な新田義貞を祀っている神社で、太田金山の山頂付近に鎮座している。義貞の末裔、新田俊純・地方有志で謀り、明治六年（一八七三）、神社創建の許可を得て、明治八年（一八七五）に社殿を建築、「新田神社」の社号を賜った。

明治一〇年には半兵衛自身も太田金山を参詣している。同年四月二二日の日誌に「午前八時金山義貞公参拝（川上 別所 齋藤 守平 敬三 久保田 森山 和二郎 高常 余 廣四郎）十一人ナリ後午四時帰宅ス」とある。「余」すなわち半兵衛も含めて総勢一名で太田金山、新田義貞公の神社を参詣している。さらに同年六月二二日の日誌にも「午前九時過緑町源三郎勇三供五郎、三人太田金山新田神社へ参詣登山ス午後七時帰宅ス」とあるように、東京緑町的小林源三郎、長男勇三と使用人三人で太田金山と新田神社を参詣している。

翌明治一一年四月二二日の日誌には「午前八時学校連 小里仁 山藤象之助 桜井佳十郎 久保田孝作 近藤弥平 星野氏 森山吉蔵 鈴木折三 木村半五郎 余 敬三 合十一人 太田金山義貞公神社へ参詣正十二時過太田町松ノ屋へ一同立寄午饭ヲ喰ス」と、半兵衛も含め学校関係者を中心に総勢一名で太田金山、新田義貞公神社を参詣、その後、松ノ屋で昼食をとっている。

明治一二年から一五年までの日誌には太田金山等への参詣の記録はないが、明治一六年の九月二三日の日誌に「午前八時過川上大人余明十供才助都合四人太田金山新田神社及吞龍上人高山神社等参詣午後五時無事一同帰宅」とある。半兵衛も含め小俣学校教員川上広樹、明十郎、才助の四人で、今回は太田金山、新田神社のほかに吞龍上人、高山神社等も参詣している。翌二四日の日誌には「午前八時半頃きね」とよ両児女及鏡小杉付添仿車三輛太田へ遊歩ス」とある。「太田へ遊歩」とあるが、太田金山等、同じ場所に行ったものと思われる。

吞龍上人は、現在の群馬県太田市金山町にある浄土宗の寺院・大光院で、通

称「子育て吞龍」、「吞龍様」と呼ばれている。慶長一八年（一六一三）、徳川家康が先祖とする新田義貞を祀るために吞龍上人を招聘して創建された。吞龍上人は当時、多くの子が間引き（殺児）をされていた状況を悲しみ、それらの子どもを弟子として引き取って育てたため後世の人々から「子育て吞龍」と呼び慕われた。境内裏には新田義貞や吞龍上人の墓がある。

高山神社は明治時代に創建された比較的新しい神社で、高山彦九郎を祭神として祀っている。明治六年（一八七三）に高山彦九郎の生誕地細谷村に石祠が設けられたが、地元民が神社創建を政府に願ひ出て、明治一一年（一八七八）に内務卿の許可を受けた。さらに明治天皇、各皇族の下付金、一般の寄付を得て金山丘陵の支脈の小丘である天神山中腹に社殿を造営。明治一二年（一八七九）に鎮座を行った。翌明治一三年（一八八〇）三月、県社に列格、昭和七年（一九三二）に現在地の山頂に遷座された。

明治一八年三月八日の日誌にも「午前九時頃左ニ 川上氏渋井氏出半森山 関三郎小又学校助教近藤木村石川三氏都合八人太田金山義貞公参夫吞龍師へ参詣」と、半兵衛も含め小俣学校や小俣村関係者等総勢八人で太田金山、新田神社、吞龍上人等を参詣している。

なお『明治十八年六月乙酉 日誌』と表記された日誌には明治一八年六月から一二月までの日誌が収録されているが、同誌の九月一六日の日誌に「○太田町吞龍上人開山基當日ト云フ足利市中該参詣人雨ヲ冒シ陸續ト通行ス実ニ盛哉開山坊」と記されている。その日、半兵衛は足利支店に勤務しており、吞龍上人の開山日であるその日は、雨にもかかわらず、足利町からも大勢が吞龍上人の参詣に向く光景を目の当たりにしたのであろう。

同年一月八日の日誌には「午前八時過余山口須井小泉内田今尾都合六人乗車太田鈴木萬三郎氏招キ二寄金山松茸刈珍見物登山ス」と銀行社員ら六人で金山に松茸刈に向いている。

次に太田金山以外の群馬県内の観光、寺社参詣、行楽等について年月順にみていくことにする。

(二) 明治一年

① 二月一七日、敬三と知人等が桐生町に角力見物

明治一一年二月一七日の日記に「午前九時過敬三供猪平大原阿政新川貞助四人桐生町角力へ行」とある。半兵衛の二男敬三と使用人の猪平、大原の「阿政」すなわち阿部政二郎、新川の吉田貞助の四人で桐生町に角力見物に出掛けていた。相撲の地方巡業が桐生で行われたのか、或いは地元の相撲大会であろうか。

② 四月、桐生天満宮の開帳期間中に家族や知人等が参詣

明治一一年四月一〇日の日記に「○桐生町天神開帳 本日廿一日迄二十日間」とあり、四月一〇日から三〇日まで二〇日間、桐生町の天神天満宮の御開帳が行われた。その期間中の四月一八日に「敬三桐生町天満宮開帳へ遣ス」と敬三を天満宮開帳に赴かせている。さらに一週間後の四月二四日には「館林小室牧三郎妻おふき桐生町開帳へかけ立寄一泊ス：○銀二郎桐生開帳分実家行」と、館林の小室牧三郎の妻おふきと木村家の使用人銀二郎も桐生天満宮の開帳に参詣している。翌二五日は「○母并ちよ鏡下女えい小室おふき同小兒下女都合七人桐生天満宮開帳へ遊行午後五時帰宅」と半兵衛の家族や使用人、小室おふき等都合七人が日帰りで桐生の天満宮開帳へ参詣に出向いている。

天神天満宮は、人々に「天神様」と歌でも親しまれているが、学問・受験の神様とされる菅原道真を祀った神社である。天神天満宮は、福岡の太宰府天満宮をはじめ全国各地に数多く存在し、江戸時代以来、天神信仰は極めて盛んであった。江戸時代は庶民の子弟にも「読み書き算」が必須であるとして寺子屋が普及、寺子屋の机は「天神机」とも称された。学問の神にあやかって、学問がはかどるようにとの願いが込められていることであるが、机を横からみた形が神社の鳥居に似ているからという説もある。

(三) 明治一二年四月一九日、前橋の産泰神社参詣

明治一二年四月一九日の日記には「午前九時過かつ明十郎皆川みき女両車産泰神社分新川村へ参ル」とある。半兵衛の妻かつと四男明十郎、皆川みきが人

力車二輦で産泰神社に参詣後、新川村に赴いており、二日後の二二日「午十二時かつ 明十郎皆川みき新川より帰宅ス」とある。産泰神社は群馬県前橋にある安産と子育てを祈願する神社であり、満二歳を迎えた明十郎の健やかな成長を祈願したのであろう。また皆川みきは子どもが欲しかったのであろうか、同年一月二日の日記に「皆川みき養子ヲ貰ヒ祝儀ス」とある。次に群馬県の観光・行楽に関しては明治一二一五年の日記にはなく一六年の日記にみられる。

(四) 明治一六年

① 四月二二日、新川の「お角桜」を見物

明治一六年四月二二日の日記に「新川吉田両家へ年禮ス吉田源造氏案内おかく桜花見物ニ行」とある。すなわち半兵衛が新川の吉田家に年礼に行った際に、吉田源造の案内でお角桜を見物、日記に「真二聞シニ増さる大樹ノ垂枝也」と讚嘆している。続けて日記には「此櫻樹タルヤ幹ノ周圍一丈七尺斗枝下凡式丈余高サ凡十間余垂枝四圍ノ直径凡十間余実ニ稀有ナル老名樹」と、その大樹ぶりを記すとともに「惜哉農民茅屋ノ庭前ニ屹立セリ甚殺風景桜樹ヲシテ言語ヲ發セシメバ變地又ハ桜樹近傍清浄ナラシメ衆庶ノ縦覧人ニ佳境ナル快樂ヲ與ヘシ」ヲ哀訴スベシ嗚呼」と、「農民茅屋ノ庭前ニ屹立」しているのみで桜樹周囲の殺風景な光景を杞憂し整備改善を訴えている。

お角桜は建久三年（一一九六）に当主の角之丞が天満宮を祀り、その記念に植樹し、娘の「お角」に因んで「お角桜」と称するようになったと伝えられている。そして万延元年（一八六〇）に桐生の文人、土屋半溪が絵巻物に「新川村の境、於角桜と唱える樹、新井定右衛門庭先前在之也」と書き記している。初代の桜は昭和二三年（一八四八）に枯れ、現在の桜樹は、その時の若芽が大きくなったもので、四月上旬頃には春爛漫と咲き誇るしだれ桜で有名である。現在、桐生市新里村新川にあり、市の指定天然記念物にも指定されている。

② 一一月二二日、富岡製糸場等を縦覧

半兵衛は明治一六年一一月二二日には富岡製糸場を縦覧している。二二日朝、

吉田貞助と共に人力車二輛で発車、伊勢崎町、玉村町、新町宿、藤岡町を経て下日野村の木村藤七方に到着宿泊、翌二日は木村藤七氏の案内で「山路凸凹坂路峻険頗ル困難漸ニシテ午後一時過吉井町へ到着」、その後、二里半の富岡町までは道路もよく「別而橋梁堅固ノ新設ナリ午後三時前富岡町へ着直ニ製糸場熟覽ス」と日誌にあるように、富岡製糸場を縦覧している。

富岡製糸場は、明治五年（一八七二）にフランスの技術を導入して群馬県富岡に設立されたわが国官営最初の本格的な器械製糸工場である。当時、器械製糸工場としては世界最大級の規模を持っており、日本の近代化だけでなく絹産業の技術革新・交流などにも大きく貢献した。開国直後の日本は、生糸、蚕種、茶などの輸出が急速に伸びたが、急激な需要の増大は粗製乱造を招き、日本の生糸の国際的評価は下落した。明治政府は器械生糸技術の導入を奨励、明治三年（一八七〇）、大隈重信、伊藤博文、渋沢栄一は官営の器械製糸場建設のため、フランス公使館の紹介でポール・ブリュナと雇用契約を結び、いろいろな立地条件等から富岡を建設地として決定、明治五年二月政府は工女募集の布達を出し、同年一〇月に操業を開始した。設立当初は「富岡製糸場」と称されたが、明治九年（一八七六）には「富岡製糸所」と名称変更、その後、明治二十年（一八九三）には三井家に払い下げられ、経営もおおむね良好、繰糸所に加えて木造平屋建ての第二工場を新設、新型繰糸機なども導入された。しかし三井は富岡以外にも三つの製糸工場を抱えており、四工場を併せた収益は決して好調とは言えず、明治三十五年（一九〇二）九月、四工場すべて一括して原富太郎の原合名会社に譲渡、名称も「原富岡製糸所」となった。原の時代は工女たちの福利厚生にも力を入れ、新しい機械の導入等で生産量も上昇したが、満州事変や日中戦争によって国際情勢が不安定となり、原合名会社は製糸事業を縮小、富岡製糸所は切り離されて株式会社富岡製糸所として独立、経営は筆頭株主の片倉製糸紡績会社（現片倉工業）が担当することとなった。昭和十四年（一九三九）に両者が合併、「片倉富岡製糸所」と改称された。昭和十五年には過去最高の生産量を記録したが、昭和十六年（一九四一）三月公布の蚕糸事業統制法により片倉富岡製糸所も統制経済に組み込まれ、同年五月の日本蚕糸統制株式会社

社の成立によって富岡製糸所は片倉から同株式会社形式上賃貸されることとなった。輸出中心に発展してきた富岡製糸所の歴史のなかで初めて輸出货量が皆無となった。戦後、GHQは経済の民主化を進め、昭和二十一年（一九四六）三月、日本蚕糸統制株式会社は解散され、富岡製糸所も名実ともに片倉に戻り、名称も「片倉工業株式会社富岡工場」となった。富岡製糸所は、戦時中も一貫して製糸工場として機能し続けた数少ない事例であり、空襲等の被害も免れ、開業当時の繰糸所、繭倉庫なども現存していることから平成二十六年（二〇一四）六月二二日の第三八回世界遺産委員会（ドーハ）で世界遺産に正式登録された。

富岡製糸場を縦覧した半兵衛は、翌二日は木村藤七氏と別れ吉田貞助氏と共に新町宿に赴き「午前十一時該宿紡績所参り案内ヲ乞イ器械場悉皆熟覽」している。東京での千住宿製絨場や今回の富岡製糸場等の視察など、半兵衛は特に織物関係の工場等には大きな興味と関心をもつて熱心に縦覧している。

（五）明治一八年

①三月一日、安楽土村の縮緬会社を視察

『明治十七歳一月 同 一八年一月ヨリ五月至日誌』と表記された日誌は、明治一十七年一月から一八年五月までの日誌が収められているが、明治一八年三月一四日の日誌に「前九時過乗車安楽土村縮緬會社へ出張緩々談話中田岩崎兄弟三氏より懇切ナル接■美肉馳走ニナリ本年四月東京上野共進會出品数十品縦覧各品何レも優等丹精可賞感後工場一覽午后二時過帰車」とある。すなわち半兵衛はこの日安楽土村の縮緬会社を縦覧、懇切な説明を受けているが、同会社は四月の上野共進會に製品を出品、いずれも優等の評を得たとある。半兵衛は上京した折は毎回、上野共進會も観覧しており、そこに出品した作品が好評を博したということと感動も大きかったと思われる。

②五月一日、小室氏の案内で館林の躑躅ヶ崎を見物

明治一八年五月一日の日誌に「午前八時相場氏及小泉吉太郎余三人舫車三輛ニテ館林小室氏本支両家へ訪へ酒肴馳走ニナリ午後二時過躑躅ヶ崎へ小舟

ニ乗し見物ニ小室両氏ノ案内ニ而参ル」とある。すなわち当日は相場朋厚、小泉吉太郎らと三人で館林の小室家を訪問、小室氏の案内で躑躅ヶ崎を小舟で見物、日誌に「花満開絶美景色尤も佳境也」と絶賛している。

躑躅ヶ崎は、古来ヤマツツジが自生する地で、室町時代の書物にも「躑躅ヶ崎」の名で記されている。江戸時代初期にもツツジの名所として近隣に知られ、寛永四年（一六二七）、館林城主榊原（松平）忠次が、ツツジの古木群をこの地に移植、以降、大名らの手により保護育成がはかられてきた。昭和九年（一九三四）、その価値が認められ「躑躅ヶ崎」の名で国の文化財、名勝に指定された。毎年、開花期になると各地より多くの観光客が花見に訪れている。

以上、群馬県の寺社参詣や名所等の見物についてみてきたが、群馬県に伊香保温泉、四万温泉、草津温泉など多くの温泉場もあり湯治にも訪れているが、湯治については項を改めて考察することとする。次に栃木県内の名所の観光、行楽、寺社参詣等について考察することにする。

三、栃木県内の名所の観光、行楽、寺社参詣

半兵衛は明治六年三月に第六大区（足利郡・梁田郡）担当の学区取締に任命になり、以後、担当区内の学校巡回など教育振興に尽力している。その様子は明治六年の日誌『學區日誌』、明治七年の日誌『學務雜誌』に記されている。当時も栃木県内各地の観光や行楽等もおこなったであろうが、右記二冊の日誌は専ら学区取締としての任務に関する記録のみで、観光や行楽など私生活に関する記述はほとんどない。私生活面が記述されるようになるのは明治九年以降の日誌においてである。したがって明治九年以降、各年の日誌を資料に年次順に半兵衛や家族の栃木県内の観光、行楽に関してみていくことにする。

（一）明治九年

①三月二六日、学区取締たちと上柏尾村の牧牛場（発光路）を見物

学区取締の任務として毎月一回、栃木師範学校で学区取締会議が開催されているが、明治九年三月一七日から三十一日まで会議が開催されている。その会議

期間中の三月二五日は会議がなかったのであろう、学区取締大塚枳太郎と久野村の安生順四郎氏宅を訪れ（里程四里半）、さらに大塚、安生と共に中柏尾村の巻嶋忠兵衛氏宅を訪問、夕刻になったので同氏宅に宿泊、酒造業を営む同家で酒肴を馳走になっている。翌二六日は行路嶮岨で屈曲な山道を登り（行程二里半）、上柏尾牧牛場へ至れり。続けてその牧牛場について日誌に「平原丘陵散出凡周圍二里余モアラン直經三十丁余アリ字地名發光路ト云」とあるように、その牧牛場は「発光路」（ほっこうじ）と称された。続けて「安生氏大塚君僕三名酒ヲ汲ム精神ノ疲勞ヲ慰メリ」と酒を酌み交わし、疲勞を癒している。続けて日誌には「音にきく牧牛里をきて見れば きゝしにまさる發光路かな」等の和歌も記されている。

②五月三日、家族らが日光山参詣

栃木県の有名な観光地といえは日光の東照宮であろうが、明治九年五月三日の日誌に「午前八時かつ まさ〇木崎多つ〇出半いし〇出太なを〇皆川みき都六人足利より供一人差添日光山へ参詣發途ス」とあるように、家族、親戚、知人たち女性ばかり総勢六人で日光山に参詣に出発している。以後、日光には半兵衛も家族や知人たちもしばしば参詣に訪れている。

③六月一八日、川嶋長十郎と勇三が日光山参詣に出発

同年六月一七日の日誌に「午後六時過川嶋長十郎氏入来日光行ヲ勇三へ進メ其夜勇三支度シテ川嶋同行五十部同氏宅へ泊翌十八日朽木へ着之よし」とある。すなわち川嶋の勧めで川嶋と勇三の二人で日光山参詣に出掛けている。

④八月一四日、小倉山渡辺氏の隠棲宅を訪れ絶景を鑑賞

同年八月一四日の日誌には「小倉山渡邊氏棲隱へ訪ヒ酒肴大ニ馳走ニナリ山房主人在宅尤も歡樂愉快ナリ」と小倉山の渡辺邁県学務課長の隠棲宅を訪問、馳走になる。午後に山房を辞して「石尊山ナルへ登山シ夫ヨリ安養院墳墓ノ地参詣帰宅ス」とあり、同日欄外には「日光赤城榛名其外北越ノ諸山

路通」と、経過した行路を記している。そして当日の日記に「避暑ノ勝地北窓ヨリ涼風漸々来り遠望日光赤城榛名■北越ノ諸山路通尤モ佳妙眼下ニ清泉ノ流レアリ田畝數里風景ノ勝地ナリ」と、途中、経過した行路が、日光、赤城、榛名等の山々を臨む風光明媚な情景を日記に記している。

⑤一〇月一五日、学区取締たちと琴平山（琴平神社）を参詣

明治九年の一〇月一〇日から二〇日までの一〇日間、栃木師範学校で学区取締会議が開催されているが、その期間中の一五日の日記に「映晴日曜日休暇午前九時琴平山へ遊歩足立山士家江口川上杉野余六名ナリ午後六時漸帰宿ス」とある。その日は日曜で会議もなく、学区取締たち六名で琴平山に遊歩している。

琴平山は栃木県柏倉町と佐野市（旧葛生町）の境にある標高三四〇メートルの低山で山頂には琴平神社がある。この神社は全国金比羅神社・琴平神社の総本宮である讃岐の金刀比羅宮より神爾を迎え祀られており、最盛期には神社境内に多くの茶屋が立ち並び、参拝客も多く来参したという。

⑥十一月九日、二二日、子ども、家族が足利町に菊花見物

同年十一月九日の日記に「午前九時足利へ出張足立杉野面會八日町植新菊作観場へ子供とよ志む敬三鏡々四人人力車ニテ遣ス」とある。すなわち半兵衛が足利町に出張した折、子どもら家族四人を人力車で八日町「植新」（植木屋新太郎の略記）の菊作観場に遣している。さらに二日後の一二月二日の日記には「午前十時母せい まさ 供きく歩行足利菊見物二行午後六時過母まさ帰宅」と母、せい、まさ、下女きくの四人が徒歩、日帰りで足利町の菊見物に出かけている。十一月はまさに菊花鑑賞の絶好期であった。

(二)明治一〇年

①二月二八日、家族が足利町に芝居見物

明治一〇年二月二八日の日記には「老母 とよ しむ 敬三々四人足利支店へ出車芝居見物ナリ」と、半兵衛の母や子どもら家族四人、人力車で足利町ま

で芝居見物に出かけている。このように半兵衛の日記をみていくと、結構、家族・子どもたちを行楽等に赴かせていることが指摘できる。

②九月一九日、半兵衛、県北巡回の折り日光山東照宮を参詣

前述したように明治九年五月に家族らが日光山に参詣しているが、明治一〇年九月には半兵衛自身が日光山東照宮を参詣している。半兵衛は明治一〇年九月に学区取締を辞任、前後して第四十一国立銀行の設立に向けて株主等、協力者を募るべく栃木県内をくまなく巡回している。そして県北の今市方面を巡回中の九月一九日の日記に「午前六時丸治発車今市宿葛屋茶漬午後二時日光鉾石町紙屋半平方へ旅泊三時頃案内者相頼ミ本社へ参詣御内陣及奥院等詳細拝覽ス并宝物什器等見覽午後五時頃紙半へ帰投」との詳細な記述がある。すなわちその日は「丸治」（丸山治作の略記）旅宿を午前六時に出発、今市の葛屋で茶漬を食した後、日光鉾石町の紙屋半平方に宿をとり、午後三時頃、案内者を頼んで日光東照宮の本社、内陣や奥院を拝観、宝物類も詳細に縦覧している。翌二〇日も「午前二時〇大猷院殿御霊ノ席拝ス午後三時過帰宿ス」とある。

日光東照宮は、栃木県日光市に所在する神社で、江戸幕府初代将軍・徳川家康を神格化した東照大権現を主宰神として祀っている。家康は元和二年（一六一六）四月一七日、駿府で亡くなるが、遺命により遺骸は駿府国の久能山に葬られる。そして同年中に久能山東照宮の完成をみたが、翌・元和三年（一六一七）に下野国日光に改葬されることとなった。日光では同年四月に社殿を完成、奥院廟塔に改葬され、一周期にあたる四月一七日に遷座祭が行われた。寛永一年（一六三四）九月に三代将軍家光が日光社参し、荘厳な社殿への大規模な改築が行われた。「大猷院」は三代将軍家光の廟所である。全国の東照宮の総本社の存在であるが、他の東照宮と区別するために「日光東照宮」と称されることが多い。隣接する輪王寺、日光二荒山神社を含めた二社一寺は、「日光の社寺」としてユネスコ世界文化遺産にも登録されている。近年は特に外国人の参詣者、観光客が数多く訪れており、県内最大の観光地となっている。

③以後も家族、知人等が日光山を参詣

以後も半兵衛の家族や知人、使用人等が日光山をよく参詣している。明治二年四月六日は「母 せい とよ しむ 合四人獨歩足利支店泊日光山参詣遊行ス幸料ハ廣瀬定兵衛氏」と半兵衛の家族四人が足利支店に宿泊、翌七日に「母 せい とよ しむ廣瀬定平妻おのふ都合六人立人力車ヲ以發途ス」と広瀬夫妻も加わり都合六人で日光山参詣に出発している。

明治一三年は七月一七日の日誌に「全作氏日光山参詣」と木村家の使用人、内田全作が日光山参詣に出発している。同年九月一六日は「午前六時小泉氏日光山行出發ス金井武重同伴」と小泉兵八郎が金井武重の同伴で日光山参詣に出発している。金井武重は旧足利藩士で正しくは「武茂」と書く。明治一四年も八月九日「午前五時半敬三穴原兩人日光山参詣ニ出發ス」と敬三と穴原が早朝に出発、五日後の一四日に「日光ヨリ敬三穴原兩人前十一時帰宅ス」とある。明治一五年以降の日誌には日光山参詣の記事は見当たらない。

(三) 明治一一年

①栃木町出張の折り巾(錦)着山を参詣(七月、十一月)、招魂祭を見物(九月)

銀行開業後、半兵衛は日常的には足利支店に勤務するが、時々栃木本行にも出張している。明治一一年七月一日の日誌に「安田支店為換方へ罷出鈴木氏同道巾着山招魂社へ見物ニ参ル」と、栃木町の安田支店為替方に赴いたついでに銀行員鈴木要三と巾着山招魂社を参詣している。また同年十一月一日の日誌にも、栃木本行に出張した折り「午後一時錦着山招魂社へ小関氏同伴参詣」と、銀行員小関熟作と共に錦着山招魂社を参詣している。

巾着山は旧名、箱森山で本来は「錦着山」と書く。名称の由来は山容が巾着の形に似ているからとも、躑躅が満開の頃は錦を着ているように美しいからとも言われている。山上にある招魂社は、もともとは戊辰、西南の両役における戦死者を祀り、その忠魂を慰めるため醸金をもって建築されたもので、明治一一年一〇月に本格起工し、明治一二年九月、初代県令鍋島貞幹と県下有志により社殿、社務所等の建物が完成した。大正二年五月の栃木町議会において招魂

者名義となっている土地を「錦着山公園」とした。また昭和一四年五月四日、招魂社制度の改正により山上の招魂社は錦着山護国神社となった。

また同年九月二四日には東京からの帰り栃木本行に立ち寄っているが、その折に栃木招魂祭を見物、当日の日誌に「栃木招魂社祭奠アリ尽夜煙火ヲ揚ル参詣人大群集市中ノ雑沓立錫ノ地ナシ」と招魂社の祭典で町中が群集で溢れており、煙火が昼夜打ち上げられるなど実に賑やかな様子を日記に記している。

②一〇月一三日、板荷村に赴く途次、喜久沢神社を見分

半兵衛は、第四十一銀行栃木本行開業間もない明治一一年一〇月一二日、日光奈良部村の銀行役員鈴木要三宅を訪問、馳走になり、翌一三日に鈴木要三、安田忠兵衛と三人で板荷村に向かう途中、見野村で藤原郷の古蹟・喜久沢神社を見物している。当日の日誌に「午前九時 鈴木 安忠 両氏共三車板荷村へ趣ク往道見野村ニ藤原郷ノ古蹟アリ尤モ縣社喜久沢神社ト云フ鹿沼宿ノ西北ニ當リ距離凡二里余ニ古賀志山獨立ス其奇山猿猴数多山居スルヨシ」とある。

喜久沢神社とは、南北朝時代に南朝の忠臣・藤原藤房郷が僧形となり、鹿沼の喜久沢の地に草庵を結んで隠棲し、この地で亡くなった。藤原郷の死後、郷が使用していた鏡、観音堂塔、古銭等が見つかり、弘化四年(一八四七)に村人たちが藤原郷を御祭神として社を建て、明治五年(一八七二)、土地の名前をとって「喜久沢神社」と称するようになったという。

③一二月一七日、栃木町の大平山(大平神社)を参詣

明治一一年一二月一七日の日誌に「午前九時 余 伊東久賢松井貫七兩人同伴大平山へ参詣ス」とあるように三人で大平山(神社)を参詣している。

大平山は栃木町にある標高三四一メートルと高くはないが歴史のある山であり、なかでも戦国武将上杉謙信が騎馬隊を練習させた地に因んで「謙信平」と呼ばれる場所は、春桜の季節は豪華な花見を楽しむことができる。山本有三の「路傍の石」の石碑もある。山の中腹には大平山神社、頂上には富士浅間神社、大平山城跡がある。大平山神社は瓊瓊杵尊・天照皇大御神・豊受姫大神をはじめ

め、多くの神を祀っている。第五十三代淳和天皇が風水害や疫病で人々が苦しむ様子に心を痛め、「下野国の靈峰三輪山に天下太平を祈る社を造営せよ」との詔を賜り、日の神であり太陽のように命を育む「天照皇太御神」、月のように人々に安らぎを与える「豊受姫大神」、星のように人生の道案内をしてくれる「瓊瓊杵尊」、この「日・月・星」等の御神徳をあらわす三座の神様をお祀りするよう造営されたという。

(五) 明治一二年

① 三月、母とまさ足利町に遊山

明治一二年三月一三日の日記に「午前十時母まさ足利町へ遊山へ出車ス」とある。母と四女のまさ足利町に遊山に出掛けている。足利で一泊し二日後の一五日「午十二時頃足利母並まさ帰宅ス」とある。行先は記されていないが、蓮岱山にでも行ったのであろうか。半兵衛は日常的に足利支店に通勤していたが、このように家族が時折、足利町に行楽で出かけている。

② 九月二日、家族、使用人等が小俣村石尊へ登山参詣

明治一二年九月二日の日記に「午前八時敬三守平直入百之助岩吉五人小又村石尊へ登山参詣ス」と、半兵衛の二男敬三、糟川守平と木村家の使用人ら計五人で小俣村の石尊へ登山参詣している。石尊山はかつて石尊信仰で栄えた山で、古い信仰の名残が息づいている山である。山頂には石尊宮があり、現在でも毎年八月には「梵天揚げ」と称する祭りが行われる。

② 十一月三日、家族が足利大日（鏝阿寺）を参詣

足利町の名刹といえど国宝にも指定された国の重要文化財、大日（鏝阿寺）であろう。明治一二年一〇月一二日の日記に「足利大日〇阿寺住職及世話人四人寄附ノ「ニ付来臨ス」とある。〇印のところは「鏝」という字が入るところであるが、難解な字で半兵衛も書けなかったものであろう。半兵衛の所に鏝阿寺の住職が寄附依頼に訪れている。そして同年十一月一三日の日記に「午前九時母

及まさ（車兵蔵）足利大日へ参詣二行午後六時帰宅」とあるように、母と四女まさ車夫兵蔵の人力車で日帰り足利大日の参詣に出掛けている。

「足利大日」とは、足利町にある真言宗大日派の本山・鏝阿寺で、詳しくは「金剛山仁王院法華坊鏝阿寺」と称する。足利氏の氏寺で、大正一二年（一九二二）、足利氏の邸宅跡として国の史跡に指定され、その後、本堂は昭和二五年（一九五〇）年に重要文化財に指定、さらに最近の平成二五年（二〇一三）には国宝にも指定された。

(六) 明治一三年

① 六月二四日、東京の親戚が行道山へ登山

明治一三年六月二四日の日記に「午前十時小林祐之助同源三郎両氏行道山へ参詣其夜足利典舗へ泊ス」とある。東京の親戚、小林祐之介と小林源三郎の二人が小俣の半兵衛宅を来訪、足利町の行道山に参詣に向かっている。行道山は足利町の北西部にあり石尊山、剣ヶ峰（大岩山）などを擁する山塊をいう。山麓には淨因寺がある。四季を通して楽しむことができる行楽地である。

② 十一月六日、半兵衛自身が鏝阿寺参詣

明治一二年十一月一日には母とまさ足利大日を参詣したが、明治一三年十一月六日には半兵衛自身が鏝阿寺を参詣している。当日の日記に、午後四時銀行勤務終了後「直ニ和洋舎ニ至相場氏同伴鏝阿寺へ参院」とあるように、相場朋厚と同伴で鏝阿寺を参詣、「什物書画古器物等被覧イタス」と、同寺所蔵の什物（秘蔵の宝物）、書画、古器物等を拝観している。その後、酢酒等を馳走になった後、「〇院主面話ス午後六時過帰店」と院主と面話している。

郷土史家、菊地卓氏によると、当時、鏝阿寺では「住職」という言い方をしないで「院主」と称したのは理由があるという。すなわち明治維新後も鏝阿寺境内には僧侶は住んでいなかったという。中世以来、鏝阿寺の北と東西には合計、十二院（坊）の小寺院があり、その筆頭が学頭職で一山十二坊の寺務をとりしきっていた。学頭職の任にあったのは、近世になってからは現在の鏝阿

寺の西方、道路を隔てた所、すなわち現在の足利幼稚園の敷地にあった千手院であつた。江戸時代、源姓足利氏ゆかりの一族は千手院を訪ねたり宿泊などをしていたという。

(七) 明治一五年

①一〇月八日、栃木本行出張の折り盛大な栃木町招魂祭を見物

半兵衛は明治一五年一〇月八日、栃木本行に出張、当日の日記に「同夜銀行へ泊ス栃木町招魂社祭 七八九 三日間ナリ」とあるように、ちょうど栃木町招魂社祭が開催期間中であつた。そして同日の日記に「好天氣故ニ大群集雑沓ス市中町ニ造庭生人形飾もの等ヲ設又子供手踊アリ夜ニ入余モ社員若林氏ト市中見物ニ遊歩ス甚雑沓ナリ」とある。すなわち若林と共に町中を遊歩、生人形等の飾り物や子どもの手踊り等が繰り出され実に賑やかな祭りの様子が記されている。なお「生人形」とは人の姿に似せて作った等身大の人形のことである。

②二月四日 家族らが足利町へ竹沢藤治見物に行く

同年一二月四日の日記に「午前八時母及まさ〇酒店はま足利町へ出車竹澤藤治見物午後夜八時帰宅ス」と、家族たちが足利町へ竹沢藤治見物に出かけている。竹沢藤治は明治一四年、半兵衛が東京で病氣療養中、見舞いに来ていた家族らを浅草奥山で公演中の竹沢藤治見物に遣しているが、曲独楽や軽業の興行で人気を博していた。足利町にも地方公演で来ていたものと思われる。

(八) 明治一六年四月一九日、家族が足利蓮岱山、草雲翁園地に桜花見物

明治一六年四月一九日の日記に「午前八時老母及きね明十足利連臺及草雲老翁園地櫻花見物ニ出車午後五時過帰宅ス」とあるように、母、きね、明十の三人が日帰りで足利の蓮岱山および田崎草雲翁の庭園に桜花見物に出かけている。

足利連臺とは足利町の西寄りにある丘陵地、蓮岱山で、ちょうどこの年、明治一六年（一八八六）に整備され「足利公園」として開設された。以来、現在まで桜やツツジの名所として人々に親しまれてきている。「草雲老翁」とは幕末

の勤皇画家、田崎草雲で、晩年に蓮岱山の南端に移り住み、自宅兼画廊「白石山房」を設けた。日記をみると半兵衛自身は白石山房をよく訪れており、草雲との親密な交流がみられるが、この日は半兵衛の家族が草雲老翁の園地に桜花見物で訪れたのである。なお蓮岱山には明治四四年（一九一一）、和洋の懷石料理の料亭として蓮岱館が開設され現在に至っている。

(九) 明治一七年五月七日、躑躅が満開で夕日に映える白石山房園中で酒宴

明治一七年五月七日、半兵衛は田崎草雲の自宅兼アトリエである白石山房を訪れているが、当日の日記に「園中躑躅満開及夕陽池邊ノ風景ヲ賞珍亭ニおいで酒宴相場堀伊武井いろはや等なり」と、ちょうど躑躅が満開で、池辺が夕日に映えた実に明媚な風景を鑑賞している。武井は今福村在住の人物であり、「いろはや」は鮮魚商で山房出入りの商人、鈴木定次郎である。

(一〇) 明治一八年

①一月二五日、大平山神社、富士仙元山を参詣

『明治十七歳一月 同 一八年一月ヨリ五月至日誌』と表記された日記には明治一七年一月から明治一八年五月までの日記が収められているが、明治一八年一月二五日の日記に「午前十時社員遠藤若林出井三人飯島利三郎案内太平山へ参詣及富士仙元山へ昇ル」とある。すなわちその日、半兵衛は銀行員ら三人と共に飯島利三郎の案内で大平山（大平山神社）を参詣している。案内人の飯島利三郎について日記には「之ハ年来商店ニ出入油紙渋紙製造人実直大勉強ノ人物也」と評している。半兵衛は明治一一年一月にも大平山を登山参詣しているが、今回はさらに「富士仙元山」にも登っている。大平山の山頂にある富士浅間神社のことであろう。

②五月一二日、佐野の唐沢山神社を参詣

明治一八年五月一二日の日記には「小室氏午前九時過辞し一同乗車佐野在唐澤山神社へ登山小室吉右衛門氏同伴ス山上茶屋ニテ喫飯」とある。前日にも小

室氏の案内で館林の躑躅が崎の花見見物をしたが、引き続いてその翌日に小室氏と共に佐野の唐沢山神社に登山参詣しているのである。

唐沢山神社は、栃木県佐野町の唐沢山の山頂にある神社で、藤原秀郷を祀っている。藤原秀郷は俵藤太（田原藤太）の別名でも知られ、下野国押領使として唐沢山に唐沢山城を築城し、秀郷の子孫、佐野氏が居城した。秀郷は平将門の乱を鎮圧して鎮守府將軍となったことから忠皇の臣とされ、秀郷の後裔や佐野氏の旧臣らが中心となって秀郷を祀る神社の創建が始められ、明治一六年（一八八三）、唐沢山城の本丸跡地に創建・鎮座された。明治二三年（一八九〇）に別格官幣社に列格した。唐沢山城跡は、戦国時代の石垣や堀の残る関東屈指の山城で「続日本100名城」の一つにも数えられている。

四・温泉場への湯治

半兵衛の日記には、半兵衛自身や家族、知人等の各地の名所等への観光、行楽、神社の参詣等に加え温泉場への湯治の記録も多くみられる。明治一三年の日記の冒頭に「那須郡板室村温泉中風ノ湯」と、那須の板室温泉は中風に効果があることが記されている。

神崎宣武著『物見遊山と日本人』講談社現代新書 一九九一年刊によると、江戸時代には武士は参勤交代などで広い地域を移動していたが、庶民の間にも旅が流行するようになったという。そして庶民の主な旅は神社参詣と湯治であったという。農民人口が圧倒的に多かった当時、日常的な農作業もあつて神社参詣に村人が大勢が行くわけにはいかず、村人を代表しての参詣であつた。したがって出発に際して村人たちから「餞別（わらじ銭）」を貰い、神社に詣で、神社の縁起物Ⅱ「宮簞」（みやげ）を持ち帰り村人に分かち与える義務があつた。みやげはもとは「宮簞」と書き、神社の縁起物であつたが、現在は「土産」と書き、菓子などいろいろある。修学旅行等で子どもたちは親戚知人等に土産を配る慣習は今でも根強く残っている。また江戸時代の庶民の圧倒的多数は農民であつた。したがって労働の疲れを癒すために農閑期には湯治場に数日間逗留して骨休めをするようになった。それと日本人の風呂好きという国民性が相ま

つて、今でも旅行先としては温泉場が選ばれることが多い。半兵衛の日記にもいろいろな温泉場が出てくるが、主な温泉場として群馬県の伊香保温泉と四萬温泉があげられる。

（一）伊香保温泉：家族、親族、特に勇三が頻繁に出向いている

伊香保温泉は群馬県渋川市伊香保町にある温泉で、草津温泉と並んで群馬県を代表する名湯である。温泉の発見は一九〇〇年前とも一三〇〇年前とも言われているが、『万葉集』にもその名が登場している。現在の温泉街が形成されたのは戦国時代である。長篠の戦いで負傷した武田兵の療養場所として武田勝頼が当時、上州を支配していた真田昌幸に命じ、整備されたとされている。石段もこの時にできた。明治時代以降は、竹久夢二、徳富蘆花、夏目漱石、萩原朔太郎、野口雨情などの文人が多く訪れた。明治四四年（一九一〇）には、渋川から路面電車も開通、同線はのちに東武伊香保軌道線となったが、バスの台頭で昭和三年（一九五六）には全廃された。その後、東京などからの避暑客で賑わう大正九年（一九二〇）八月二〇日、深夜に火災が発生、温泉街をほとんど焼き尽くす大火となった。

戦後は歓楽街温泉として栄えた。現在、急傾斜地に作られた石段の両側に温泉旅館、みやげ物店、遊技場、飲食店などが軒を連ねており、その界限は「石段街」と呼ばれている。石段の下には黄金の湯の源泉が流れ、小間口と呼ばれる引湯口から各旅館に分湯されている。石段の上には伊香保神社がある。

ところで木村半兵衛の日記をみると、半兵衛自身は伊香保温泉にいった記録はないが、半兵衛の家族や親戚、使用人等、なかでも半兵衛の長男、勇三は何度も伊香保温泉に行っている。

半兵衛の日記をみていくと、まず明治八年の八月六日の日記に「午前六時〇六十六度映晴勇蔵小泉兵八郎兩人伊香保入湯出発ス」とある。「勇蔵」とは半兵衛の長男「勇三」のことである。八月二一日に「午後七時過伊香保より勇造小泉兵八郎帰宅ス」とあるので約二週間の湯治である。翌明治九年にも八月二二日の日記に「午前六時勇三鈴四郎兩人伊香保温泉行」と、勇三と粕川鈴四郎の

二人が伊香保温泉に行っている。そして同年九月一三日の日記に「午後七時伊香保ヨリ○勇三鈴四郎半二郎三人帰宅」とあるから約三週間の湯治である。

明治一〇年と一一年の日記には伊香保温泉行の記述は見当たらないが、明治一二年の日記では、六月六日「午前六時発車 川上先生 勇三 伊香保温泉行」と、小俣学校の教員川上広樹と勇三が伊香保温泉に行っている。そして同月三〇日の日記に「勇三川上氏伊香保へ無事帰宅ス」とあるから約三週間の湯治である。また同年には七月一六日に「小泉兵八郎伊香保温泉へ出発ス」、一〇月一日には「午前十一時頃東京安田主人供若者一人来車ス同氏上州伊香保温泉より帰路境町へ廻ル一泊」とある。第四十一国立銀行の創業者安田善次郎が伊香保温泉からの帰路に半兵衛宅に立ち寄っているのである。

翌明治一三年には七月七日の日記に「令善兵衛君千澤専助君大橋良吉君三人伊香保帰りニ立寄泊ス」と、東京の知人らが伊香保温泉帰りに半兵衛宅に立ち寄っている。七月一四日は「午前六時勇三」とよ 伊香保温泉行カス川へ廻り鈴四郎誘込夫へ本庄内田せいヲ連レ都合四人にて温泉行」と、勇三ととよが粕川鈴四郎、本庄の内田せいを誘い総勢四人で伊香保温泉に赴いている。そして三日後の七日「午後六時過勇三とよ伊香保より帰宅ス」とある。

翌明治一四年も、七月二九日の日記に「午前六時前長屋 みよ しげ 伊香保温泉へ出発ス」とある。みよとは足利郡五十部村在住の廣瀬定兵衛の養女である。翌明治一五年以降の日記には、伊香保温泉行の記録はみられないが、一五年以降は毎年、半兵衛も含めて家族全員で四万温泉に湯治に出向いている。

(二) 四萬温泉：半兵衛の大病経験後、毎年家族で湯治に赴いている

四萬温泉は群馬県吾妻郡中之条町にある温泉で、平安時代に温泉として開湯、鎌倉時代からその名が知られるようになり、「四万の病に効く伝説の湯」として現在も湯治場として有名である。四萬温泉を開いたのは関善兵衛である。中世末期、岩櫃城主斎藤氏に仕えていた田村甚五郎が永禄六年（一五六三）、山口地区で温泉宿を始め、その後一七世紀前半の寛永年間に新湯地区に進出、元禄七年（一六九四）には関家が新湯に積善館を開業した。一五代の関善兵衛が中

国の儒教の經典「易經」の中の「積善の家に余慶あり」との言葉に関連させて、「積善」に旅館を表す「館」を付して「積善館」と命名したのである。以来、今日まで田村・関の両家が四萬温泉の指導的役割を果たしてきた。明治以後は長期滞在できるよう自炊制度も確立、明治三〇年代には道路も整備され、四萬の溪谷沿いに馬車も往来するようになった。（二七）

ところで半兵衛の日記をみると、明治一一年七月二五日の日記に「午前三時過 母 敬三 志満温泉行車夫 五郎平 兵蔵」とあり、半兵衛の母と二男の敬三が志満（四萬）温泉に出向いている。翌明治一二年の日記にも八月二日に「午前二時三十分起同三時三十分過母 敬三 しむ 合三人車夫兵蔵 五郎平外一人乗車四萬温泉へ出発ス」と母、敬三、しむの三人で四萬温泉に出かけている。そして八月二三日の日記欄外に「四万ヨリ老母しむ敬三帰宅ス」とあるから、約三週間の湯治である。いづれにも半兵衛自身は参加していないが、明治一四年秋に半兵衛は心下痛という持病が悪化し、同年暮れから翌明治一五年五月までの約半年間、東京で療養生活を送る。そして療養生活を終えて帰郷直後の六月に約三週間、半兵衛も含めて家族全員で四萬温泉に湯治に出向いている。半兵衛も、自身の大病の経験から、自身も含めて家族の健康と保養に一層留意するようになったことが背景理由として考えられよう。

①湯治の動機・背景：家長として家族の健康には人一倍留意

半兵衛はもともと家長として家族の健康と安全には人一倍留意していた。明治九年一月二七日の日記に次のような「稟告」が掲載されている。

稟告

抑人間身ヲ立テ道ヲ行ヒ後ノ富貴ヲ俟ツモ疾病ノ為ニ壽域ニ登ル事能ハザレバ其憂苦言語ニ絶ヘン務ムヘキモノハ職業貴重スヘキモノハ義務愛護保存スヘキモノハ身命ナリ其身命ノ愛護保存スヘキヲ知レバ平生養生法ヲ遵守スルニシカズ雖然僻境醫員ニ乏ク曾テ良醫ニオイテヲヤ實ニ慨歎ニ不堪ナリ茲因醫員渡部道圃氏ヲ招待シテ患者ノ有無ニ不拘毎月三度宛定日之通診察スルヲ約束ス本

日ハ闔店一同無洩診察ヲ屹度受ベシ而后疾病ノ憂苦ヲ未發ニ豫防シ貴重ノ生命ヲ保全シテ我カ職業ニ励精シ壽域ニ登ルヲ希ベシ

診察定日

一 毎月 二日 十二日 廿二日 午後一時ヨリ

右之通確議候事

第九年一月廿七日 家長

そこにはまず健康第一が強調され、そのために明治九年一月、渡辺道圃を木村家のお抱え医師として毎月、日を定めて定期診療の契約を交わしているのである。半兵衛の日誌には家族の罹病に関する記事も多く、例えば明治一四年二月、四男の明十郎が感冒に罹患した際は「大患ナラス然シ小兒ナレハ真ニ大切ナリ家長自宅患者保護ス」(二月二五日)と決意を記しており、翌日、明十郎が快方に向かうと「闔家漸クニ安心ス」と記している。明治一八年秋に四女まさ子が罹病した際も、やや快方に向かうと「闔家一同大安心看護謹厳ニス」(十一月四日)と安堵を示している。そして半兵衛自身が半年間の療養生活を終えて帰郷した五月一〇日の日誌には「闔家一同安全喜躍ニ不堪也」と記している。

②明治一五年六月：日向見温泉にも入浴、ヤマ瀑布を観覧

明治一五年六月二日早朝、家族五人、人力車四輛で出発、日誌に「午前七時出發余かつ まさ、明十 小泉しむ五人舫車四輛 五郎平 久蔵 甚之助 安二郎 八人 朝新川村吉田氏へ立寄夫舫前はし田村や茶漬午後五時渋川宿青木へ泊ス」とある。翌三日は午前五時半に渋川を出発、伊勢町、中之条町を経由して午後六時に四萬温泉に到着している。不景氣の影響等で入客は少なかつたようで、翌四日の日誌に「浴客廿四五人僅カナリ本年世間不景氣ニ付浴客甚淋キ由」と記されている。六日は奥の日向見温泉に足を伸ばし、同温泉について「湯至而清潔ナリ温泉ノ質ハ四萬同性ノよし」と記している。七日には蠟石山、一六日には水晶山にも登山している。一九日は鉾山跡を見物、二〇日は日向見温泉場に行き、「夫ハ屈強壯者余共十人マヤノ瀑布見物ニ登山

ス：ヤマ瀑布頗ル壯觀其余七カ所瀑布アリ何レモ壯觀也」とヤマ瀑布等の壯觀な絶景を日誌に記している。約三週間にわたる湯治を終えて二八日には四萬温泉を出発、途中前橋で一泊し二九日に全員無事に帰宅している。

なお同年には七月一日にも「前六時敬三卯七及川上氏四萬温泉行」と敬三、使用人卯七、教員川上広樹の三人が四萬温泉に向かっている。しかし滞在期間バラバラだったようで、八月二日は「川上廣樹粕川守平兩人四萬温泉ハ帰宅ス」、八月二日には「四萬温泉ハ勇三一人午後六時帰宅ス」、八月二日には「敬三文七卯七三人四萬温泉 午前十一時小又へ帰宅ス」とある。

③明治一六年六月：高野山、日向見温泉、水晶山等に足を運ぶ

翌明治一六年も六月一杯、家族で四萬温泉に湯治に赴いている。六月二日の日誌に「四万行荷物洪紙包四箱琴一箱洋酒其外食物明ランプ箱入一箱都合六箱也馬一駄二付平次附添午前九時過出發ス」と、湯治生活に必要な荷物類を馬で運んでいる。翌三日に家族等八人、人力車五輛で出発、日誌に「午前二時起同四時前出車ス四萬温泉行 家長 かつ とよ まさ 明十 きみ一緑町小林まさ下婢てつ 都合八人舫車五輛 五郎平 甚之介 久蔵 安蔵 兵蔵 内ノ者 代一人八五人」とある。その日は渋川に一泊、翌四日に四萬温泉に到着している。到着後、七日は大小泉瀧に見物に出かけている。一〇日は「竹のや萬二郎同伴平次ヲ連高野山絶頂へ登ル蕨椎茸ヲ獲ル」。一日は日向見温泉まで足を伸ばす。一三日は「竹のや案内小倉山瀑布を見物ニ参ル」。その瀑布の様子について「峨々タル岩石直立屏風ノ如ク：真ニ名瀑布也」と記している。一四日は家族で水晶山に登山、「眺望尤モ佳妙充分散步遊フ」と記している。一六日は日向見温泉場に行くが、平治は竹の屋の案内で「雪ヲ採取ニ摩耶山ノ奥へ行團兩人ニテ四五貫余採取持参関ノ浴客一同ハ分送ス一同大悦不料」と日誌に記している。一九日は山口へ二度遊歩行、二三日は山口温泉、二四日は日向見温泉に入浴、「該所ハ山手式丁斗行湯瀑名泉アリ兩三日己前開泉ス」と記している。二八日は帰途に向け荷物を発送、翌二九日早朝に人力車五輛、馬一駄で四萬温泉を出発、渋川に一泊し翌三〇日に小侯の自宅に到着している。

なお同年は八月二〇日に「小泉氏四萬温泉行」と小泉兵八郎が四萬温泉に出発、約三週間滞在し、九月一〇日に「四萬温泉の〆小泉氏帰宅ス」。八月二八日は「敬三車夫五郎平五時前出車四萬温泉行」と敬三が四萬温泉行、約一カ月後の九月二五日に「敬三同日四萬〆帰宅」とある。また一〇月九日の日誌には「白石山房老翁四萬温泉場の過ル六日帰山ニ付」とあり、「白石山房老翁」すなわち画聖・田崎草雲も四萬温泉に湯治で滞在したことが記されている。

④明治一七年六月：草津温泉、長野の善光寺にも足を伸ばす

明治一七年も六月一杯、家族で四萬温泉に湯治で滞在している。六月二日に「〆四萬温泉行荷物為宰料出発」。翌三日「家長 かつ とよ まさ 明十郎 きみ 出半 卓三 都合九人力車六輛午前六時出車ス」と家族ら九人、人力車六輛で出発、同日夕に渋川着、宿泊している。翌四日、渋川を出発し時刻四萬温泉に到着、翌五日は「二同無事入浴」。六日は高野山に蔵取りに出かける。八日は竹ノ屋の案内で「日向見山〆廿丁余奥大明神岩山へ見物二行山路頗ル峻険甚困却ス」。一日は「関ヶ岡へ登り酒宴」、二日は水晶山に登山、一四日以降は雨天が続くが一九日は晴、草津温泉まで足を伸ばす。途中の険しい山道、川も増水のなか午後六時に「草津温泉到着湯平へ投宿ス」。翌二〇日は「前八時過〆草津温泉場縦覧ス：揚弓等遊ヒ十一時過湯平へ帰ル」。

草津温泉は群馬県草津町にある有名な温泉で、昔から「草津湯」あるいは「上州草津湯」と呼ばれてきた。「草津」の地名の語源は、温泉の硫化水素臭が強い「臭水（くさみず、くさうず、くそうず）」にあるとも言われている。湯量が豊富で湯温も高いため、昔から草津節などを唄いながら木の板（湯もみ板）で温泉をかき回し湯温を下げる「湯もみ」が有名である。

翌二一日は早朝に草津湯平を出発、白根山に登山、日誌に「該山噴火猛風該氣ガス眼鼻口等へ吹込大困難ス漸西山口へ攀登リ第一釜口噴火視直スル」秒時間実ニ猛烈言語ニ絶タリ驚愕震慄シタリ」と記している。その後、積雪も深く険しい山道を下山、信州長野県に向かい午後三時半、渋温泉場つばたやに投宿。翌二二日早朝、渋温泉つばたやを出発、行程七里余の道のりを善光寺へ向かい、

「午後二時善光寺へ到着藤屋平五郎方へ投宿休憩後善光寺拝観大勧進書院観見ス夫〆公園地等遊覧」と、旅宿で休憩後、善光寺を拝観している。

善光寺は、長野県長野市元善町にある無宗派の単立寺院で、山号は「定額山」、山内にある天台宗の「大勧進」と二五院、浄土宗の「大本願」と一四坊によって護持、運営されている。古より「四門四願」と称して東門を「定額山善行寺」、南門を「南無山無量寿寺」、北門を「北空山雲上寺」、西門を「不捨山浄土寺」と称する。日本において仏教が諸宗派に分れる以前からの寺院であることから、宗派の別なく宿願が可能な霊場と位置づけられる。日本最古の三國渡来の絶対秘仏の霊像と伝承される一光三尊阿彌陀如来像が本堂「瑠璃壇」厨子内に安置されている。江戸時代末期は「一生に一度は善光寺詣り」と言われるようになった。現在は御開帳がおこなわれる丑年と未年に多くの参拝者が訪れている。

翌二三日は早朝に長野藤屋を出発、保科村に向かうが、道路も悪路で「千隈川及犀川増水橋梁破落ル場モアリテ甚困却」。約一里余の保科峠を攀じ登るが「大困苦言語ニ絶セリ」と日誌に記している。峻険な県境、田代村を経て大笹村に到着。翌二四日は大笹村を出発、長野原町を経由して川原温泉場に着。翌二五日、川原温泉を出発、川中温泉、澤後温泉等を経由して午後三時過に四萬温泉に無事到着している。二九日に帰途に発ち、中之条町と前橋で宿泊、七月一日に小俣に帰宅、「闔家一同健全也」と日記に記している。

⑤明治一八年一〇月：伊香保温泉、榛名山にも足を伸ばす

明治一五年以降、毎年六月一杯、家族で四萬温泉に湯治に出向いているが、明治一八年については『明治十八年六月乙酉 日誌』と表記された日誌に同年六月から一二月までの日誌が収録されている。それによると六月には四萬温泉に出掛けていない。九月二三日の日誌に「小泉兵八郎氏四萬温泉〆帰宅ス」とあり、小泉兵八郎が四萬温泉に湯治で滞在している。木村家では一〇月三日から二二日まで約二〇日間、しかも今回は半兵衛と敬三の二人のみで四萬温泉に湯治で出向いている。一〇月三日早朝に人力車を出発、前橋で東京から来た敬三と合流、その日に渋川に到着宿泊。翌四日「午後五時無事四萬温泉関善氏安

着ス」。到着後、料理のせいか半兵衛も敬三も下痢を起こし体調を崩すが一〇日には快癒、日向見温泉に赴く。翌一日は天候にも恵まれ「都合四人階子泉へ見物ニ登山ス」。そして階子泉について「尤も奇観ノ瀑布賞スベシ」と日誌に記している。そして一七日には関主人ら都合四人で伊香保温泉まで赴き投宿、翌一日は「午前九時榛名山へ案内者頼ミ登山」さらに「伊香保より式里半 余 関 敬三 茂十郎都合四人榛名神社へ参詣」している。

榛名神社は群馬県高崎市にある神社で、旧社格は県社。赤城山、妙義山と共に上毛三山の一つとされる榛名山の神を祀る神社である。中世以降は「満行権現」と称され、「元湯彦命」が祭神とされていた。『榛名山志』には東殿・饒速日尊、中殿・元湯彦命、西殿・熱真道命と記されている。明治元年に現在の二柱に改められた。現在の主祭神は火の神・大山祇神と土の神・埴山姫神である。

一八日は榛名山まで往復したため疲労困憊、「同夜酒食満腹安眠ス」。一九日には四萬温泉に戻り帰途に立ち、二二日「午後三時小又本家へ安着」している。

(三) 家族や木村家の使用人等の温泉行

半兵衛の日誌によると伊香保温泉と四萬温泉以外にも木村家の使用人等いろいろな人が温泉場に赴いている。明治一〇年六月四日の日誌に「太助綱五郎再仕ニ付入来ス同人モ不快ニ付六日頃発足シテ温泉へ出行之よし」とある。木村家の使用人太郎と綱五郎が体調不良（不快）を癒すため温泉に行く。行先は書かれていないが、温泉名が分かるケースで比較的多いのは川中温泉である。

①川中温泉

明治一〇年七月三〇日の日誌の欄外に「高橋常太郎温泉行腫物発シ」とある。行先は書かれていないが、約半月後の八月一六日の日誌の欄外に「午後六時頃高常川中ヨリ帰宅ス」とある。「高常」とは高橋常太郎の略記で、川中温泉から帰宅したとある。明治一四年一〇月二日の日誌には「午前六時小杉虚東川中温泉行」とある。また明治一八年六月二日の日誌には「小泉吉太郎麻疾ニ付川中温泉ニ行」とあり、二日後の六月四日には「鈴木卯二郎麻疾ニ付川中温泉行」

とある。小泉吉太郎と鈴木卯二郎の二人が相次いで「麻疾」に罹り川中温泉に出向いており、六月二〇日の日誌に「午後小泉吉太郎及卯二郎川中温泉へ足利帰ル」とあるので二人とも約二週間の川中温泉への湯治であった。

川中温泉は群馬県吾妻郡東吾妻町（旧国上野国）にある温泉である。温泉の発見時期は不明であるが、中世から利用されていたようで、口碑によると源頼朝の臣重田四郎が健久四年（一一九三）、病により除籍され、永くこの地で療養したと言ひ伝えられている。江戸時代には応永寺の了牛和尚が近隣の村人の協力を得て湯小屋を建て、入浴客の便宜をはかったという。明治時代には近隣に旅館も出来、湯治場として賑わいを見せていたが、昭和一〇年（一九三五）の集中豪雨で跡形もなく流されたという。戦後、昭和二年（一九四七）に「かど半旅館」が再建され現在に至っている。なお和歌山県の龍神温泉、島根県の湯の川温泉とともに「三代美人湯」に数えられている。

②川場温泉

明治一五年七月二四日の日誌に「小杉虚東妻中風症ニ付上州川場温泉行暇遣ス」とある。小杉虚東は前年の一〇月には川中温泉に行っているが、今回は妻の痛風を癒すため川場温泉に行っている。翌明治一六年も八月一日の日誌に「小杉川波行」とあり、同日の「欄外」に「小杉夫婦温泉行」と夫婦で湯治に出掛けている。「川波」は「かわば」とも読めることから川場温泉に行ったものと思われる。川場温泉は群馬県利根郡川場村にある温泉である。

③その他、不明

明治一〇年八月二五日には「文七 足利市仕舞〆〇温泉行暇遣ス発足ス」とある。木村家の使用人、下瀬文七の温泉行のため暇を与えたとある。行き先が記されていないが、翌明治一一年八月一二日の日誌に「〇文七 草津温泉へ帰店ス」とあることから、明治一〇年の温泉行も草津温泉であったかも知れない。明治一一年七月一九日の日誌の下欄外に「午前七時母附敬三温泉行」とある。敬三が母に付き添って行先は記されていないが、翌二〇日の日誌に「大原〆母

敬三帰宅ス」とある。わずか一泊の滞在であるから、近場の藪塚温泉あたりではなかったかと思われる。藪塚温泉は、天智天皇の時代、行基上人によって開かれたと伝えられ、また新田義貞が鎌倉攻めの折、兵士を湯治させたとみ言われており、病を治す湯治場として知られている。その約一か月後の七月二十五日の日誌には「母 敬三志満温泉行」とあり、今度は四万温泉に行っている。

明治一三年九月六日の日誌には「鈴木氏在勤中島不在同氏入浴行 那須温泉」とある。この日、半兵衛は栃木本行に出勤、銀行員中島喜代次が不勤であったが、那須温泉に出かけていたわけである。中島の家は栃木町より北の油田村（現在の上都賀郡油田町）在住であり、那須温泉には比較的に近かった。明治一五年一月一日は「午前六時晴静かつ とく 明十共三人舁車二輛熱海へ出車 挽夫 重吉外一人」とある。当時、東京で病氣療養中の半兵衛を見舞った家族、親族が観光、行楽も兼ねて熱海温泉に出かけている。明治一六年八月二日は「堀田治助温泉行」とある。堀田治助は木村家に居候していた放浪画家であるが、この温泉か行先は書かれていない。

以上、木村家の家族、使用人、知人等の温泉行についてみてきた。主には伊香保温泉と四万温泉に数多く出向いており、特に半兵衛が大病を経験してからは毎年、四万温泉には家族で湯治に出掛け、約三週間滞在していた。その他、木村家の使用人や知人等が、特に群馬県のいろんな温泉場に湯治等で出向いていたことが確認できよう。

注

(一) 「三代目・木村半兵衛の日誌（明治八～一八年）」にみる年頭の諸行事、年中行事（国の祝日、宮中行事）、地元神社の祭礼等に関する考察』『足利大学研究集録 第五五号』二〇二〇・三

(二) 木村半兵衛の学区取締としての活動に関しては注(一)掲出別稿の注(三)参照

(三) 『足利市歴史研究紀要第一集 三代目 木村半兵衛の日誌 翻刻と解説』「学区取締」としての活動』足利市教育委員会文化課 三〇頁

(四) 『明治世相編年辞典』朝倉治彦・稲村徹元編 東京堂出版 「明治三年 招魂社祭礼」三五頁

(五) 半兵衛の日誌には、駅（ステーション）のことを「ステーション」、「ステーション」等と表記されている。平成三一年（二〇一九年）三月二十四日の『朝日新聞』の「天声人語」欄の冒頭に次の記述があった。「日本に鉄道が敷かれ始めた明治のころ、「駅」は様々な名前と呼ばれていたようだ。英語のステーションをもじって「ステン所」、さらには「蒸気会所」や「鉄道館」などの呼び名もあった。鉄道史家の原田勝正さんが書いた『駅の社会史』に教わった。」かつて「駅」については英語だけでなく、いろいろな日本語で表現されていたことがうかがわれる。

(六) 注(四) 掲出『明治世相編年辞典』「明治一六年 浅草公園地の状況」二二〇頁

(七) 同右書「明治一四年 内国勸業博覧会」一九五頁

(八) 同右書「明治一六年 隅田堤の桜」二二三頁

(九) 同右書 一九四頁

(一〇) 同右書「明治五年九月一日、神田明神祭礼」七九頁

(一一) 同右書「明治十五年 竹沢藤治の曲独楽」二〇八頁

(一二) 同右書 二〇六頁

(一三) 同右書 二二一頁

(一四) 同右書「明治一六年 水産博覧会」二一八頁

(一五) 郷土史家で田崎草雲の研究で知られる菊地卓氏によると、草雲は第二回内国絵画共進会に「十指春画」と「一棹揺山」の二図を出品し蒼古銀印を受賞したとのことである。

(一六) 注(一) 参照

(一七) パンフレット『世のちり洗う四万温泉』

原稿受付日 令和2年2月16日